

研究会「記憶と表象から読む東アジアの20世紀」のご紹介

木 下 直 子

(日本社会文化専攻)

記憶、表象、東アジア・・・これらのキーワードは、社会学を専攻し、戦時中の暴力の傷痕や戦後社会の様相を研究する私にとって、また周囲でともに学ぶ多くの院生たちにとっても、切り離せない観点を提示しています。ここではこれらのキーワードを軸に社会学専攻の院生たちが中心になって立ち上げた、韓国ソウル大学社会学科との学術交流会である研究会についてご紹介します。

本研究会はその前身となった院生の自主企画である研究発表会を経て比文の公式行事となり、これまでに2回開催されました。私は立ち上げのときから関わっています。院生が主体的に動き、先生方のご協力を得て国際的な学術交流の場を一から作り上げる経験ができたことは、事務的なノウハウを培う意味でも勉強になりました。(事務的な仕事に多くの時間と労力を費やしてきたのは双方の大学のパイプ役となった金泰植さんですが。)

プレ研究会

事の始まりは2009年、比文の社会学専攻の金泰植さんが当時ソウル大社会学科に留学中であり、金さんの留学中にソウル大社会学科と比文がつながり、学術交流の場が持たないかという構想が浮かび上がったことにあります。

日韓の学生同士で率直な意見交換ができれば、非常に刺激的な場となるだろうと思われました。研究会として制度化すれば、継続的な学術交流が可能となり、日韓を中心とした東アジアをめぐる知を問い直し、再編成を試みる実践の場が形成できます。まずは九大比文の社会学専攻の数名が、ソウル大に行き、院生の前で発表できればうれしい、そんな思いがありました。

そういうわけで金さんがソウル大側に相談すると、幸い社会学科の先生方や院生のみなさんが関心を持ってくださいましたので、ソウル大社会学科と比文の直野ゼミとの院生交流会として2009年6月15日にソウル大で研究発表の場を持つことができました。なによりソウル大社会学科の学科長である鄭根植先生のご支援があってこそ実現できた場であったと改めて実感します。

このときの研究会は九大の社会学の院生4名のみが発表し、それに対しソウル大の院生がコメントを発表するというものでした。準備期間の短さにも関わらず、ソウル大には発表原稿と翻訳した要旨を掲載した冊子を作成していただき、さらに各発表者に対し一人ずつ院生がコメンテーター

を務めてくださり、短期間でコメントを、しかも日本語にして用意して下さっていたことには本当に頭が下がります。



プレ研究会

第一回研究会

先生方のご協力のもと晴れて公式行事となった本研究会は、「記憶と表象から読む東アジアの20世紀」という公式テーマを掲げ、参加者を社会学専攻の学生に限らない、開かれた場を提供できるようになりました。第一回目は九大が会場となり、2010年2月19日に伊都キャンパス、翌20日に西新プラザで開催となりました。

この第一回研究会は、比文側に歴史学の分野からの発表者があったこと、ソウル大側に社会学を足場に文学作品を扱う発表があったことなどが研究会の構成を豊かにし、領域横断的にテーマに関わっていく場が形成されたと思います。ホスト校としては発表者枠はできるだけソウル大側に確保したかったため、ソウル大が5名、比文の院生は2名の発表者となりました。それゆえ公募で幅広く発表者を募ることはできなかったのですが、当日は社会学や歴史学以外に文学や思想などの分野を専攻する比文院生数名、さらに箱崎の人間環境学府からも院生が研究発表を聴きにきてくれましたので、活気ある研究会となりました。

初日はソウル大の鄭根植教授の基調講演「韓国戦争の記憶と脱冷戦 韓国戦争写真集を中心に」も行われました。また初日の全ての研究発表の後、一日を振り返り、院生研究発表に対し比文から三隅先生や直野先生のコメントもなされたので、私たち院生は双方の大学の先生方から多くを学ぶことができました。

初日は朝から夕方まで研究発表、夜はビッグオレンジで

○○○ 海外レポート

懇親会、二日目は午前中に研究発表をしてお昼に終了しました。十分に密なスケジュールです。両日も院生同士の総合討論の時間を設けてあり、ほどよい緊張感が持続しました。



第一回研究会後の懇親会

第二回研究会

第二回は2010年7月9～10日にソウル大で開催されました。比文は社会学から2名、文学専攻の院生が3名発表者として参加し、三隅先生、直野先生、波瀾先生に同行していただきました。ソウル大からも鄭根植先生を始め社会学科の先生方にご参加いただくことができ、研究会が本格化しました。

9日は九大側が当日の朝出発する関係で午後からの開始となり、社会学を中心に4名の院生が研究発表を行いました。他大学の院生の参加もあり、刺激的な場であったといえます。

10日のプログラムは直野章子先生の講演「トラウマ記憶と主体——原爆生き残りの証言から」と、比文の文学専攻者を含む5名の院生発表でした。私自身、日頃研究指導を受けている直野先生のこうした発表を聴くのは案外珍しい機会です。概念整理の手がかりとなり、方法論の面からも勉強になりました。

それから文学専攻の院生の発表を集中的に聴けたことは、たとえば茶園梨加さんの発表「石牟礼道子『苦海浄土——わ

が水俣病』の改稿にみる聞き書きの問題」など、その発想や分析の深め方など社会学専攻の院生にとっても大変示唆に富むもので参考になりました。今後も多くの分野の学生が集まることで、より一層相互に学び合えることと思います。

11日は2組に分かれてフィールドワークに行きました。一組は伝統的な風景が残っている北村という地域に、もう一組はサムスングループが運営する美術館 Leeum に見学に行きました。どちらもソウル大院生が案内してくれて、一日中付き合ってくれる寛大さと歓待の精神に韓国文化の神髄に触れる思いがしました。



第二回研究会

研究会の今後

研究会を重ねる上ではやはり成果を出さなければなりません。第二回の研究会で全発表が終わった後、研究会のあり方をめぐり将来的な見通しを議論する中で、共同研究プロジェクトとしての方向性を固め、ゆくゆくは成果物を出版できればという話にもなりました。このような目標があると、ますますやりがいを感じます。

第三回は順番的には九大がホスト校になる予定です。詳細が決まり次第学内に掲示をしますが、分野を超えて、多くの院生が参加してくれることを期待しています。研究会には学会とはまた違う魅力があり、テーマに沿って議論を深めていけるという利点があります。積極的に関わってくれる人の参加を歓迎します。